特259

847

菅原時保禪師

碧巖錄講演

（其二十四）

始

特259
847

帝國圖書館藏

碧巖錄講演

（其二十四）

臨濟宗
建長寺派管長
菅原時保禪師

昭和十五年九月 帝國圖書館藏

碧巖錄講演 其二十四 目次

第六十六則　巖頭收黃巢劍……一頁
第六十七則　傅大士講經竟……二二頁
第六十八則　仰山汝名什麼……三八頁
第六十九則　南泉畫一圓相……五八頁

碧巖錄提講

第六十六則　巖頭收黃巢劍

◎垂示

垂示云、當機覿面、提陷虎之機、正按傍提、布擒賊之略、明合暗合、雙放雙收解弄死蛇、還佗作者、』

讀方

垂示に云く、當機覿面に陷虎の機を提げ、正按傍提に擒賊の略を布き、明合暗合、雙放雙收して、死蛇を弄することを解するは、還た他に作者あり。

字解。

當機覿面、當機は機會に遭遇すること。覿面は面を見ること。其の意は、如何なる場合に臨み如何なる人に面會しても。

――陷虎之機、拔群の働き、非凡の藝。――正按傍提、正面からも傍面からも。縱横自在、横拈倒用。――布、運用、布施。――擒賊之略、敏活の働き。――明合暗合、其の場其の場に順應。――雙放雙收、放つときは一切、收むるときは一切。收に徹底、放に徹底すること。――弄死蛇、毒蛇のこと。意は人を殺す蛇。――還佗作者、活用の出來る人を指したる句。――

分解。

當機云々から陷虎之機までは師家たる人の腕力を表す。――正按云々から賊之略までは矢張り師家たる人の鉗鎚を云ふ。――明合云々の二句は無碍自在底。――弄死蛇は非凡の活作略を述ぶ。――

提講。

如何なる場合でも如何なる時でも、出合ひ頭に、遭遇した途端に、間に髪を容れる隙を見せず即時即刻、陷虎の機を提ぐでなければ、眞箇の宗師家とは云はれぬ。聊かでも隙があり油斷があつたら、自己の失敗は元より、學者をして蹉過せしめるこ

とになる。――正按とは正面、傍提とは正面の反對。正面から攻撃を受ける時にも正面から攻撃をする時にも、又は側面から攻撃をする時にも側面から攻撃を受ける時にも、出沒自在、變化自由。――大泥棒を生擒する心構へ氣構へで、表面から堂々と押しかけることもあれば、裏面から密々に攻めかくることもある。是を明合暗合と云ふ。――雙放雙收は、或時は門戸を豁開し他の自由に任せ、或時は要津を坐斷して彼をして動き得ざらしむ。要は向上の宗乘を擧揚し以て學者を接化する活方便であり活作略である。されど解弄死蛇の一段に至つては、(死蛇は毒蛇のこと)即ち虎以上、賊以上の惡毒極まる者に至つては、普通一般の宗師家では如何ともなし得ず。故に巖頭、雪峰の如き拔群越格底の大作家に讓らざるべからず。サァ其の拔群越格の活作略、大作家の接化ぶり、それは本則。速かに去つて實參すべし。

◎本則

擧、巖頭問僧、什麼處來、僧云、西京來、頭云、黃巢過後、還收得劍麼、僧云、收得、巖頭引頸近前云、因、僧云、師頭落也、巖頭呵々大笑、僧後到雪峰、峰問、什麼處來、僧云、巖頭來、峰云、有何言句、僧擧前話、雪峰打三十棒趕出、』

讀方

擧す。巖頭僧に問ふ、「什麽の處よりか來りし。」僧云く、「西京より來れり。」頭云く、「黃巢過ぎて後還た劍を收得せしや。」僧云く、「收得せり。」巖頭頸を引べ近前して云く、「囚。」僧云く、「師の頭落ちたり。」巖、呵々大笑。僧、後に雪峰に到る。峰問ふ、「什麽の處よりか來りし。」僧云く、「巖頭より來れり。」峰云く、「何の言句かありしぞ。」僧、前話を擧す。峰打つこと三十棒にして趕ひ出せり。』

字解。

巖頭、雪峰、兩禪師のことは前に簡單ながら申しておきました。――僧、尋常一樣の僧ならん。――西京、聞く、長安を京兆と云ひ、洛陽を西京と云ふ、――又は洛陽を東京と云ひ、長安を西京と云ふ、と。其の名稱、蓋し時代によりて變換するらしい。』此の公案は唐末の出來であるから西京は長安のことである、と井上君の說。衲は極めて歷史及地理には盲目。故に略せるだけ略します。――黃巢、昔曹州に黃巢と云ふ者あり。初めは鹽を賣る商人であつた。それが遂に土匪の頭となり、王仙芝と云ふ友人と黨を結び、處々方々を荒し廻つて居ると途中で劍を拾うた。取上げて見ると、天賜黃巢と銘が刻んである。是より一段と自信が强くなり、自ら衝天大將軍と名乘り、長安を陷落さ

せ自ら皇帝と稱し、國號を大齊と名づけ、年號を大統となすに至つた。されど惡運は長く保ちがたし。程なく李克用に破られて滅亡。――――收得劍麽、二說あり。一は云く、黃巢の天より賜はつた其の劍を貴殿は所持してをるか。』――――二は云く、兵亂の後であるから何人も護身刀を所持して居るが貴殿は如何に。――――引頸、頸を前に突き出すこと。――――因、例せば、重き物を持上げる時に力を入るために、ヤッとかエイとか聲を掛けるありさま。――――

分解。必用なし。

提講。

或一日、一人の僧が巖頭禪師の處へ參禪のため相見に來た。『此の當時、巖頭禪師は佛敎の大迫害を避け、鄂州の或處で身を舟渡しに俏し、政府の眼を逃れてをられたと云ふことである。』脚下點檢と云ふことがある。故に巖頭禪師、來僧の力如何を點檢せんが爲に直に、「什麽の處より御座つた。」と探竿を試みられた。玆へ圜悟禪師は、「未開口時、納敗缺了也。」と云はれたが、聊か早輕である。毛を見て馬を相する勿れ。形を以て衲僧を輕視すべからず。されど僧が巖頭禪師の問ひに對して、「西京より來れり。」と云うたは如何にも正直であるが、衲僧分上としては太だ不見識である。圜悟禪師の未開口云々の下語は蓋

し是れがためならん。』――――西京より來れりの一言で、巖頭禪師に脚下十二分に點檢され了れり。故に圜悟禪師、果然、「それ見ろ、拙僧が云ふ通り敗缺を納れた。」――――禪僧の形相はして居るものゝ、實は一個の小賊。巖頭禪師の如き大賊の前に出ては日下の燈である。――――巖頭禪師、西京來と聞いては更に一問あり。圜悟禪師曰く、「巖頭禪師もお先まつくら。頭の落ちるを懼れず、便ち恁麽に問ふ。」と。――――圜悟禪師、局外に居るから恁麽に云へる。若し局に當らば是又巖頭の部類ならん。――――「あの一時、天下の耳目を驚愕させた黃巢の大亂後、彼の所持してをりし劍を貴殿は手に入れられたか。」僧云く、「收得す。」僧、巖頭禪師の問はるゝ意旨が電光の如く見えたものと見えて、「たしかに其の劍は手に入れました。」黃巢の天より賜はりたる劍ではない。無始劫來、未來永劫、人々具足、箇々圓成、靈光不昧の那一劍。是れは收得の不收得のと云ふ沙汰に非ず。』――――されど、修せざれば現れず證せざれば得られず、で、修せざる人には拔くことが知れぬ。證せざる人には用ふることが分らぬ。衲の如きも修せず證せざる黨派だ。――――收得し居るならサァ其の劍で拙僧の首を斬り落してみなさい。突然頸をつき出して、「囚。」と。――――是れを陷虎の機と云ふ。大火聚の如く近傍すべからず。大智禪師は毒氣射人と著語された。如

何にも大なる毒氣である。圜悟禪師は、「須く機宜を得て始めて得べし。」禪機に乏しき僧であるから無事にすんだ。――是れは巖頭の機宜を得た處である。僧云く、「師の頭落ちぬ。」――お望み通り禪師の頭を切り落しました。似たることは似たり、是なることは未だ是ならず。虛勢にして空砲。――圜悟禪師の下語が面白い。「只錐頭の利を見て鑿頭の方を知らず。」と。豈此の僧のみならんや。恁麼の人、麻の粟の如し。巖頭、呵々大笑。此の一笑、百雷一時に落つるが如し。賞笑か罰笑か、親切に研究すべき處である。圜悟禪師は玆の處へ、「天下の衲僧如何ともせず。」と下語してをらるゝ。果して如何ともせず、であらうか。徒に分別思慮を費やす勿れ。例に依つて實參實悟すべし。此の公案と難兄難弟の一則がある。參考のために添へておきませう。

龍牙禪師が若き時、德山禪師の處へ往き、「學人莫耶の劍を以て師の頭を取らんと擬する時如何。」と問うた。時に德山禪師、今の巖頭禪師の如く頸を引いて近前して、囚と云はれた。龍牙、本則の僧と同じく、師の頭落ちぬと云うた。此の時、德山は呵々大笑でなく、便ち方丈に歸る。一言も云はず笑ひもせず方丈へ引込まれた。故に龍牙は大勝利を得たりと思ひ、得々然として其の後、洞山禪師の處へ往き、以前の話を自慢らしく述べた。其の時、洞山禪師が、「我に德山の頭を借し來れ。」お前が德山の

頭を落したと云ふが、其の頭を私に一寸見せて、と云はれた。此の時、龍牙は言下に於て大悟。遂に香を焚いて遙に德山を望んで禮拜懺悔なされたとある。本則の僧も龍牙の若き時と同じく、大笑された、それを印可だと思うて居つたかも知れぬ。それしきの事で印可さるゝなら、敢へて骨を折つて修行するが者はない。』僧、後に雪峰に到る。』胸中何となく不穩と見える。遍參、元より惡しからず。時節到來せざれば花も咲かず實も結ばぬ。――雪峰禪師は巖頭と弟子兄弟である。かゝる事を知つてか、或は知らずにか、其の邊は不明である。』此の本則では初めに巖頭に相見し後に雪峰に到る。此の前の五十一則では、初めに雪峰に相見し後に巖頭に到る。故に此の本則と五十一則と相對照して讀むべしと井上君は云はるゝが、如何にもであります。

峰問ふ、「什麽の處よりか來る。」例の通り脚下點檢。――兄弟だけあつて其の間、一模に脫出。』されど權あり實あり、放あり、把あり、輕々に看過すべからず。

僧云く、「巖頭より來る。」正直一點張り。正直の頭に神やどると云ふものゝ、時と場合に依りては正直も馬鹿に類することあり。圜悟禪師は果然として敗缺を納れり。相變らずであらうと思うたが果して然り、と。衲に云はすれば、圜悟禪師は僧の答の

處へ敗缺を納ると云ふであらう、と思うて居つたら果然として然りであつた。――峰云く、「何の言句か有る。」是れが擒賊の略。――此の僧、今となつては如何ともなす能はず。事實一々言上せざるを得ず。罪狀の如何に依りて三十棒は一棒も許されぬ。――

僧、前話を擧し、笑はれたる處に至つて多少勢が拔けたやうだ、と飯田師は忖度されたが、或は然らん。若し確信があれば最後の處で雪峰禪師に、如是と一掌を與ふべきである。それなきを見れば飯田師の忖度は當れり。圜悟禪師は僧の前話を擧する處へ下言して云く、「便ち好し趕ひ出すに。」と。雪峰禪師は只は趕ひ出さぬ。「その樣な手ぬるいことで一大事が手に入ると思ふか。此の間拔けめが。」と死蛇を弄する腕を以て、打つも〳〵三十棒を食はし、「チト、ヒ來イ。」と云うて趕ひ出したは流石に雪峰禪師である。――此の僧、三十棒下に於て大悟すれば三十棒は實に有難き三十棒であるが、若し大悟せざれば打たれ損のみにならず、恨むべきの三十棒である。――何人と雖も平素參究の功を積んでおかなければ、雪峰禪師の如き名宗匠の接化に逢うても不得要領で了らねばならぬ。――本則は是れ位にして次は頌。

◎頌

黃巢過後曾收劍、　大笑還應作者知、　三十山藤且輕恕、　得便宜是落便宜。

讀方

黃巢過ぎて後曾て劍を收めたりと。大笑は還た應に作者知りしなるべし。三十の山藤は且く輕恕。便宜を得たるは是れ便宜に落ちたるなり。

字解は略す。

分解。

黃巢の一句は僧にかけて云ひ、大笑の二字は巖頭にかけたもの。還應作者知は雪峰をさした。三十山藤の一句は三十棒では寬大の處置だの意。得便宜云々は、巖頭禪師の處で好都合であつたから、其の手でやつたら雪峰禪師の處では當がはづれた、と云ふ意味。

提講。

第一句で此の則の全體を頌じ了る。是れは雪竇禪師の慣手段にして、雪竇禪師一流の家風。他人の企て及び得ざる處。第二句以下は雪竇の判決と見るべし。大笑還應作者知、越格の作家であれば、巖頭禪師が何を笑はれたか一聞千悟である。それが證據に、同參だけあつて雪峰禪師は巖頭禪師の大笑された其の

意旨を十分承知。故に僧に三十棒を與へて趕ひ出された。諸君、試みに巖頭の大笑と雪峰の三十棒と、是れ同か是れ別か。サァ云うて見なさい。眞箇の處を知らんと欲せば巖頭になるべし雪峰になるべし。――結句の得便宜是落便宜、何人でも、眞箇此の事を手に入れ、或時は巖頭の大笑、或時は雪峰の三十棒、そのものそれに對して當機覿面、正按傍提が出來たら、それこそ陷虎の機を提げ擒賊の略を布く大作家にして、死蛇を弄する底の大偉人である。然るに殘念なことには此の僧、恁麽なること能はず。先には笑はれ後には打たれ、大いに面目を失した。嗚吁氣の毒氣の毒。皮下に血ある底の漢ならば、巖頭の大笑で悟り、雪峰の棒下で脫落せざるべからず。然るに悟り得ず脫し得ざるが故に、得便宜是落便宜と云はざるを得ず。敢へて僧のみに非ず。巖頭、雪峰兩禪師、大笑も無駄、三十棒も無駄、可謂、得便宜是落便宜、と。――お互が得便宜是落便宜ではならぬ。御用心々々々。

（昭和十四年七月八日講演）

第六十七則　傅大士講經竟

◎本則

舉、梁武帝、請傅大士、講金剛經、大士便於座上、揮案一下、便下座、武帝愕然、誌公問、陛下還會麼、帝曰、不會、誌公云、大士講經竟、」

讀方

舉す。梁の武帝、傅大士に金剛經を講ぜんことを請ひたり。大士便ち座上に於て案を揮かすこと一下して便ち下座せり。武帝愕然。誌公問ふ、「陛下還た會せりや。」帝曰く、「不會。」

誌公云く、「大士は講經し竟りたり。」

字解兼分解。

梁武帝、是れ第一則の處に於て大略申し述べておきました。故に茲では略します。――傅大士、大士は尊稱の號。本名は傅翕。婺州の生れ。法號を善慧と云ふ居士。武帝と同時代。武帝の佛法に歸依された其の時は八歲の少年であつた。傅大士は十六歲で結婚し、普建、普成の二子をあぐ。其の後發心して佛道に入る、年僅かに十九歲。寶誌和尚の死んだ翌年、と本にはある。故に傅大士が武帝の前で講經した時には寶誌和尚は陪席して居らぬ。然るに本則に陪席したことになつてをる。是れに

は多少の議論がある。――傅大士と云ふ人は一種異樣の性質を所持した人。其の一例は、佛道に入るや、田畑は無論のこと邸宅まで賣拂つて、一大無遮會を設け多くの人に御馳走をしたり、また妻子を賣却し、而して獲たる金を以て法會を設け、數多の僧侶に供養をなされた。武帝の御前で講經なされた時は三十六歳。此の人の逸話と云ふべきものが二つある。

一つは、村の人と一所に魚を漉りに川に行き、歸途、その魚のはいつて居る籠を川の中に沈め、サァ〳〵お前たち、命が惜しいなら此の籠から早く出てゆけ、命が惜しくないものは此の籠の中にをれ、と云うて魚を逃がしてやつた、と云ふ話。如何にも慈悲深き人である。』もう一つは、輪藏を發明されたこと。輪藏とは佛の一切經を入れておく八角形の廻轉式書架。今日でも日本の著名なる大寺にはそれが殘つてをります。衲の知つて居る一は東京の淺草觀音樣の横にある經藏、それであります。此の人にして此の病ありと云ふことがあると共に、此の人にして此の偉業ありと云ふべきであります。是等のことにつき井上君は種々意見を述べて居らるゝが、今は略します。

序に善慧大士の心王銘を左に傳寫しておきます。

觀心空王、　玄妙難測、　無名無相、　有大神力、
能滅千災、　成就萬德、　體性雖空、　能施法財、

觀之無形、呼之有聲、心戒傳經、
水中鹽味、色裡膠青、爲大法將、
心王亦爾、身內居停、決定是有、
自在無礙、所作皆成、不見其形、
是心是佛、是佛是心、面門出入、
欲得早成、戒心自律、應物隨情、
除此心王、更無別佛、了本識心、
心性雖空、貪瞋體實、識心見佛、
到彼岸已、得波羅蜜、念々佛心、
知佛在內、不向外尋、佛心念佛、
慕道眞士、自觀自心、淨律淨心、
即心即佛、即佛即心、心即是佛、
欲求成佛、莫染一物、
入此法門、端坐成佛、

心明識佛、曉了識心、離心非佛、離佛非心、
非佛莫測、無所堪任、執空滯寂、於此漂沉、
諸佛菩薩、非此安心、明心大士、悟此玄旨、
身心性妙、用無更改、是故智者、放心自在、
莫言心王、空無體性、能使色身、作邪作正、
非有非無、隱顯不定、心性雖空、能凡能聖、
是故相勸、好自防慎、刹那造作、還復漂沉、
清淨心智、如世黃金、般若法藏、悉在身心、
無爲法寶、非淺非深、諸佛菩薩、了此本心、
有緣遇者、非古來今、

法身偈　　傅大士

空手把鋤頭、步行騎水牛、人從橋上過、橋流水不流、

無相偈　　傅大士

夜々抱佛眠、朝々還共起、起坐鎭相隨、語默同居止、
纖毫不相離、如形影相似、欲識佛去處、祇是語聲是、」

以上、原文のまゝ、説明は致しません。諸君の力に應じ御了解を、と云うておきます。閑を得て講義致します。

金剛經は金剛般若波羅密多經の略稱であります。此の經は大般若經六百卷中の第五百七十七卷である、と聞いてをります。」此の經は佛陀が須菩提のために空理の本體を説明なされたもので、經の結尾に、「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀。」とあります。されど空理と云うても眞空妙有と云ふ空理であるから、世間普通の單に何ものもなしと云ふ空と同一の觀をなすべからず。此の金剛經を禪家に於ては特に珍重する。六祖慧能大鑑禪師、其の人は金剛經の中の「應無所住而生其心」と云ふ一句を聽き得て佛門に入つたし、――周金剛と呼ばれ金剛經に精通なされた方は、經中の「三世心不可得、」（過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得、）と云ふ、是れに大疑心を起し、龍潭燈火吹滅の處で大悟徹底なされた。――　敢へて古人の足跡を逐ふべしと云ふに非ず、只斯の

如き歴史ありと云ふ。――大士便於座上云々講經竟、是れは讀んで字の如く何人にも一讀了解が出來ますから省略しておきます。

提講。

茲に梁の武帝に就き面白き一小話がある。要は金剛經の活應用である。衲は思ふ、此の當時、武帝は金剛經の研究をして居られたのではなきや。然らざれば特に金剛經を講じさせる必要はない。金剛經は經中に、「亦無有定法如來可說、何以故、如來所說法、皆不可取、不可說、」――「說法者、無法可說、是名說法、」とあります。故に武帝の如き、小乘教に通達しても向上宗乘に透徹せざれば、金經剛の如き大乘には齒はたゝぬ。其の點は多少御承知と見えて、傅大士を請じて金剛經を講ぜしむることになつた。

或本では、始め金剛經の提唱を誌公にせよとの下命であつた。然るに誌公、欽んで拜受せず。其の所以は、向上宗乘に到達したる者にあらざれば說き得ざることを武帝に覺知せしめんが爲に敢へて辭退された。武帝は誌公の心中を知る能はず。辭退するなら何人か呼んで提唱を、と云ふことであつたかも知れぬ。そこで當時、世人に尊敬されつゝある傅大士を奏上し、許可を得て愈〻講經と云ふことになり、誌公も陪席を申しつかつた。

傅大士、座に上るや、武帝始め文武百官、何れも耳を澄まし聲を潜め、未だ曾て聞かざる珍説妙談あるならんと、心ひそかに期待してをつたことであらう。――――處が愈〻金剛經を講ぜんとする其の一刹那に於て、見臺を一振ふり、一言も吐かず、そのまゝ下座。――――是れを見たる文武百官、何れも狐に鼻をつまゝれた如く啞然たるのみ。特に武帝の如きは大いに愕然たり。武帝の失望落膽を見兼ねて、誌公云く、「陛下おわかりになりましたか。」――――帝曰く、「不會。」何が何やらさつぱりわからん。――――武帝のわからんと云はれた、それ、それが眞箇の金剛經であることを夢にも知らぬは武帝の武帝たる眞面目。――――誌公云く、「大士講經竟りぬ。」と。昔世尊が説法せんが爲に座に陞られた。未だ世尊が一言を陳べざるに、文殊白槌して、「諦觀せよ法王の法。法王の法は是の如し。」とやられた。其の古智を誌公が眞似たではなからうが、それと相似てをる。此の處へ圜悟禪師が、「也た須く國を逐ひ出して始めて得べし。」と。第一則に、達磨を逐ひ出した時に誌公も諸共に逐ひ出すが好いと云うてあつたが、今亦大士も誌公も逐ひ出してしまへば好いと云はるゝは如何なる理由か。向上宗乘から見れば揮案一下も己に是れ第二第三。況んや講經竟れりなどと無駄ごとを云ふ、是れは圜悟禪師の金剛經提唱である。――――古人底は古人底として、即今

お互は如何に金剛經を提唱すべきや。

◎頌

不向雙林寄此身、却於梁土惹塵埃、當時不得誌公老、也是栖々去國人、

讀方

雙林に向つて此の身を寄せずして、却て梁土に於て塵埃を惹けり。當時誌公老を得ざりしならんには、也た是れ栖々として國を去りし人なりし。

宇解。

雙林、傅大士の生れ故郷であると云ふ説と、常に雙林の間に居住してをられた故に、と云ふ説とあります。何れにしても大同小異である。――惹塵埃、茲では慾望、野心、名譽等に看るべし。惹とあるから、起す、顯す、生ず、である。――栖々、俗に云ふソワ〳〵腰のおちつかぬ樣子。

提講。

自己の本家郷、自己の本分に從容自適して居るが何よりの幸福であり、何よりの氣樂である。太公望の如きも孔明の如きも、家郷、本分に安居して自然の美を賞讃して此の世を終らば、或は一層の人格者となつたかも知れぬ。然るに王者の師となり軍事の參謀となつて、一時盛名を天下に轟かしたと云ふものゝ、

畢竟するに夢幻空華である。傅大士の如きも雙林に穩坐せずして、ノコ〳〵と梁の武帝の招待に應じて金陵まで出て來て金剛經を講ずる。下化衆生、和泥合水と云ふものゝ、或は虚名のためでなしとは斷言出來ぬ、と雪竇禪師が忖度さるゝ。果して然るや否は衲等の知る處に非ず。されど一應其の理由なきに非ず。

――看よ案を揮つて便ち下座。それは達磨のまねか、世尊を氣取つてか。――　如何にも俗臭紛々である。幸に誌公が陪席して世話をしてくれたから無事で終了したものゝ、若し誌公が講經竟りぬと云うてくれなければ、無論傅大士の面目がたゝぬ。

「達磨大師の轍を踏んで栖々コソ〳〵と裏門から逃げ出るより外に道はない。」と雪竇禪師が抑下の中に托上してをらるゝ。誌公のたすけ舟で傅大士は浮き上つた。故に良友は持つべし、益友は無かるべからず。以上の妄講亂唱が曇華の講經竟んぬである。――

（昭和十四年九月十六日講演）

第六十八則　仰山汝名什麼

◎垂示

垂示云、掀天關、翻地軸、擒虎兒、辨龍蛇、須是箇活鱍々漢、始得句々相投、機々相應、且從上來什麼人合恁麼、請擧看、』

讀方

垂示に云く、天關を掀げ地軸を翻し、虎兒を擒へ、龍蛇を辨ずるには、須く是れ箇の活鱍々の漢にして、始めて句々相投じ、機々相應ずるが如くなることを得べし。且く從上來、什麼人か恁麼なるべかりしぞ。請ふ擧す看よ。』

字解。

天關、』星の名である。今は天と見るべし。

地軸、』地の底、地球の根底。今は天に對する地で差閊へなし。

掀翻、』ひつくりかへす、――はねかへす。所謂、一拳拳倒黃鶴樓、一趯趯翻鸚鵡洲。』

活鱍々、』敏活に働くこと。鯉魚の波間に躍るが如くキビ〳〵したる勢を云ふ。』

句々、機々、』句々は言語、――機々は動作。――其の人、

其の場、それに對しそれに應じ、かねて用意せずして相投じ相合すること。

從上來、』昔から今日までの意。

合恁麼、』「恁麼なるべかりしぞ、と讀むべし。恁麼なるべき、では意義が上句と接續調和しない。」と井上君の說。如何にも然りである。

分解省略。

提講。

由來眞箇の禪僧は(敢へて禪僧に限らず)天地一枚の自己である。故に蒼々たる天關や茫々たる地軸を自由自在に轉換したり翻轉したりすることは平生の茶飯でなければならぬ。それが理論の上では出來ても實際は容易でない。――又虎兒を生擒したり龍蛇を辨じたりすることも不用意に出來なければならぬ。それも口舌の上では容易であるが事實は極めて難、難である。』されど苟も法幢を建て宗旨を擧揚して居る一家の主人公であれば、天關を掀げ地軸を翻し虎兒を擒へ龍蛇を辨ずなどは朝飯前のお茶も同樣、至つてお手輕である。本則の主人公たる仰山の如きがそれである。』――

以上の如き拔群越格の主人公に對し聊かも恥ぢざる賓客となるには、須く之れ箇の活鱍々の漢にして始めて、句々相投じ機

々相應ずることが出來る。それは誰だ。本則の賓客、三聖其の人である。』――

因みに云ふ、主となる元より易からず。賓となるも亦易からず。主人となつて賓に滿足を與へ、賓となつて主人に不滿を抱かしめざることは、極めて易きに似て至つて難し。特に外交上に於てをや。實に難である。更に進んで禪に於てをや。是れ又難中の大難である。而も衲等が竹馬の舊友と相會し些少の思慮分別を用ひず談笑の間に要件を果たし互に滿足を得る如く、宗乘の上に於て其の難中の大難の好模範を垂れし人は、云ふまでもない、仰山と三聖である。』請ふ擧す看よ、と圜悟禪師が座下の雲水僧に向つての垂示である。』

◎本則

擧、仰山問三聖、汝名什麼、聖云、慧寂、仰山云、慧寂是我、聖云、我名慧然、仰山呵々大笑、』

讀方

擧す。仰山、三聖に問ふ、「汝、名は什麼ぞ。」聖云く、「慧寂。」仰山云く、「慧寂は是れ我。」聖云く、「我が名は慧然。」仰山、呵々大笑せり。』

字解。

仰山、』 潙山靈祐禪師の弟子。――三聖、』 臨濟義玄禪師の

弟子。――――仰山の事は三十四則に、三聖の事は四十九則に、既に略説しておきました。故に今は略します。

提講。

此の本則につき第一に心得おくべきことは賓主互換と雙放雙收である。

賓主互換、』互に主となり互に賓となること。主が主に止まらず、或時は賓となり、賓が賓に止まらず或時は主となる。所謂、入我我入、かれ我に入り、われ彼に入る。是れを句々相投じ機々相應ずと云ふ。然らざれば眞箇の妙味は出て來ぬ。主は主に止まり賓は賓に止まつて居つては、他人行儀で一場の虚禮に了る。――――

雙放雙收、』讀んで字の如く、放つときは總てを放ち、收めるときは總てを收める。收めるときは全宇宙を收めて唯自となし、放つときは全自己を放つて唯他となす。唯他と放つ處に、唯自と收める處に、天關を掀げ地軸を翻し虎兒を擒へ龍蛇を辨ずる妙興がある。然らざれば四時も其の次第を失ひ萬物も其の發育を缺く。

其の賓主互換底、其の雙放雙收底、それを仰山、三聖兩人の問答上に於て十分點檢すべきである。

仰山、三聖、何れも當時禪門の横綱力士である。年輩からも

法系からも仰山は先輩である。故に位地に於て多少の相違ありと雖も、法力悟道の上では所謂龍虎と云ふべく、何れも何れも逸物である。――

思ふに仰山かねて三聖を知り、三聖も亦仰山を知る。』然れども相見は今日が始めであるらしい。仰山既に天關を掀げ地軸を翻す力量を有す。三聖も亦虎兒を擒へ龍蛇を辨ずる法眼を備ふ。故に其の對談、其の問答、互に主となり賓となり、放つときは雙放、收めるときは雙收、句々相投じ機々相應ずる底、可謂、雙龍玉を爭ひ春蘭秋菊其の芳を競ふ、と。――

一日三聖、仰山を訪ふ。仰山、三聖に問ふ、「貴殿の名は什麽

ぞ。」――仰山が三聖に向つて問はれた名は肉體の名ではなく、父母未生以前の面目のことではなからうか、と妄想を起す人があるが、それは無駄心配だ。肉體を外にして本來の面目なし。本來の面目を除いて肉體なし。肉體の名が即本來の面目の名。本來の面目の名が即肉體の名である。恁麽は心身脱落、脱落心身して知るべし。』聖云く、「慧寂。」ハイ拙僧の名は慧寂で御座る。慧寂は主人公たる仰山の名。然るに賓客たる三聖が主人の名を奪うた。（賓客變じて主人公となり、併せて宇宙の總てを雙把し盡せり。）仰山は賊意ありて探竿を入れしに非ず。故に無造作に仰山云く、「慧寂是我。」慧寂はおれだ。（速に元の主

人公となり、兼て法界を雙把し終れり。）聖云く、「我名慧然。」サヤウ拙僧は慧然であります。仰山は仰山の本座に歸り、三聖は三聖の席に着す。』此の邊の處を經には、諸法住=法位=世間相常住と、東坡は、到得還來無=別事=、廬山煙雨浙江潮、と吟じられた。仰山、呵々大笑。兩手を叩いて笑うた。――三聖も兩手を打つて呵々大笑されたであらう。然らざれば句々相投じ機々相應ずるにはならぬ。或人は、仰山の呵々大笑の味ひを合點する者が少いと云うて、此の呵々大笑に何事かが抱含して居る樣に思うて御座るが、何事かが抱含して居つたら、それは仰山の呵々大笑でなくして、さう思ふ人の呵々大笑である、と衲は呵々大笑してやる。餘談は中止。

今日、父子の間に於ても、夫婦の間に於ても、師弟の間に於ても、社會、國家、其の他總ての間に於て、仰山と三聖の如く、お互が主となり賓となり、賓となり主となり、而して放つときは雙放、收めるときは雙收、聊かも惡意賊氣なく、去年のヤ、と今年のヤ、と相對して、バア――と云ふ如きであつたら、と常に理想を抱きつゝあるが、いつになつたら此の理想が實現するであらう。當分理想のまゝで實現の見込なし。』されど理想あれば必ず實現するは自然の道理、堅忍持久して理想實現の曉を待つのみ。――以上拙劣なる閑言語と雖も、多少天關

を掀げ地軸を翻してをります。只句々相投じ機々相應ずる人のなき、それが殘念であります。」――

◎頌

雙收雙放若爲宗、騎虎由來要絕功、笑罷不知何處去、只應千古動悲風。

讀方

雙收雙放なんたる宗ぞ。虎に騎るには由來絕功を要す。笑罷みたり知らず何の處にか去りしぞ。只應に千古悲風を動ずるなるべし。

字解。

雙收雙放、」把住は收、放行は放。此の二つを行ふこと。仰山、三聖の兩人にかけて見るべし。

若爲宗、」なんと云ふ宗ぞ。今日お互が、なんと云ふエライ人である、と云ふと同意味。宗は主義又は宗師。

虎、」仰山、とする人がある。三聖も虎の仲間だ。

絕功、」非凡、優秀、越格、超越。――功は手柄。

動悲風、」煩悶、苦惱の意なり。

提講。

第一句は仰山、三聖の活商量底を頌じたのである。見よ、兩禪師の雙收雙放、其の新鮮の樣子を。

雙收、』仰山問ひて、汝名は什麽、と三聖を收む。三聖は直に、慧寂、と仰山を收む。之是を雙收と云ふ。

雙放。』「慧寂は是れ我。」「我名は慧然。」各々本座に歸りたる處が兩禪師の雙放である。』――この賓主互換の虛々實々、眼にもとまらぬ雙收雙放の一大法戰の活劇は生れて始めて拜見した。實に面白い。これは何と云うてよいか名のつけやうがない。嗚吁めづらしい。――圜悟禪師も始めて拜見したものと見えて、「他に幾人かあらん。」「仰山、三聖の外には、かゝる面白き藝術を事實に展開する人はあるまい。八面玲瓏とは蓋し此の事ならん。」と。――如何にも八面玲瓏である。仰山、三聖兩人の眞理を拈提し宗旨を擧揚さるゝ新鮮さは眞に空前絕後と云ふべし。』お互も日用の上に於て斯くありたきもの、斯くなければならぬ。それには平素の修養が第一である。其の元正しからざれば其の末亂る。始めが大切、本が肝要。』

第二句の、騎虎云々、』仰山、三聖、其の問答底の横拈倒用は、其の互に虎となり騎手となりたる離れ業は、曲馬師以上の曲藝であります。到底尋常の人のなし得ざる處。それを何の苦もなく平生の茶飯の如くお手輕にやらるゝには何かそこに仔細がなければならぬ。――仔細大いにあり。圜悟禪師曰く、「是れ頂門上に眼あり肘臂下に符あるにあらざれば、爭でか這裏に到る

を得ん。」と。如何にも然りであります。頂門上の眼は無論心眼のことで別に説明する必用はない。肘臂下の符、是れは支那道教の人たちの護身符で、此の護身符は讀んで字の如く護身符である。其の符を肘にかけて居れば一切の惡鬼惡魔も害を加ふること能はず、と云ふ。それを禪者が借用し、法力だにあれば如何なる場合に臨むと雖も決して不覺を取ることはない、と云ふのである。仰山、三聖、兩人の如きは頂門に眼あり肘臂下に符あるが爲に斯く自由の活動が出來る、と云ふ意に取るのである。

云ひ換へれば頂門上の眼、肘臂下の符、それが絶功の證據である。功を絶つとは絶大なる功と云ふこと。我に是れ〳〵の力があり我に斯く〳〵の能あり、と云ふ力や能に縛せられて居る間は、絶功ではない。例せば學者は學問に縛られず、財産家は財産に縛られず、宗教家は宗教に縛られず、禪者は禪に縛られざる、かゝる處が眞箇の禪者、眞箇の宗教者、眞箇の財産家、眞箇の學者である。仰山、三聖、兩人の如きは宗教者の臭みも禪者の臭みも更に一點なし。故に其の時に臨みその場に應じ、句々相投じ機々相應ずることが出來る。之是を絶功と云ふ。——何事にも此の絶功が必要である。——以上の二句で、仰山、三聖、其の人の無作にして能くなし無爲にして能くなす底を完

全に吟じ了れり。

轉結の二句は雪竇禪師の見識。

笑罷不知何處去』仰山の呵々大笑、其の大笑は其の時限りで空中に消えた。サァ其の笑は何れの處に落着した。落着の處を知る人があるか。渠無國土、何得逢渠。――若し落着する處があつたら、それは僞物。眞物は未だ曾て落着の處なし。』されど、無しとも云ひきれず、有りとも云ひきれぬ。有り有り、答へもそする山彥の聲。無し無し、答へてもなし山彥の聲。畢竟此の何をか笑ふ。――呵々大笑、――意あらば自救不了。

只應千古動悲風』是れは雪竇禪師の老婆。果して然るや。井

上君は云ふ、「此の呵々大笑の眞意義に就いて天下の禪僧は永久に煩悶することであらう。」と。是れ又果して然るや。秋野師は云く、「聞きとる人がなければ誠に悲風となる。聞きとる人は清風颯々たる知音である。」と。如何にも然り。悲風となすも清風となすも彼にあらず自己自身にあり。人の口端に乘らず、自己自身の大安心、大安樂を得るまで研究すべし、修養すべし。』

（昭和十四年九月二十三日講演）

第六十九則　南泉畫一圓相

◎垂示

垂示云、無咱啄處、祖師心印、狀似鐵牛之機、透荊棘林、衲僧家、如紅爐上一點雪、平地上七穿八穴則止、不落寅緣、又作麽生、試擧看、』

讀方

垂示に云く、咱啄無きの處は、祖師の心印にして、狀、鐵牛の機に似たり。荊棘林を透るものは、衲僧家にして、紅爐上一點の雪の如し。平地上に七穿八穴なることは則ち且く止る。寅緣に落ちざること、又作麽生、試みに擧す看よ。』

字解。

咱啄、』口で食すること。嘴でつゝいて食ふ、と云ふ意味。無の字を冠らしてあるから、齒もたゝぬ、かみつけぬ、と云ふこと。

祖師心印、』達磨持參の禪そのものゝ骨髓。

鐵牛之機、』如何なる力も動かせぬ。心機なきも能く河を守る。委細は三十八則に述べてある。

荊棘林、』古則公案又は煩惱妄想。何れにせよ、通過を妨げ自由を害するもの。

如『紅爐上一點雪』大悟したる衲僧、荊棘林を透過したる偉人が一切の事物に對して無碍なる樣子を形容したる句。

平地上、』荊棘林に對しての句。日常底。――

七穿八穴、』縱横自在の換へ言葉。

寅緣、』寅は連絡の義、とある。關係することを寅緣と云ふ。

――茲では文字や言句の閑葛藤に擒はれざること。

分解は略す。

提講。

祖師の心印、禪の骨髓は、言語道斷、心行所滅、以心傳心である。水を飲んで冷暖自知するが如く、自ら肯心するより如何ともなしがたし。口舌も牙齒も到底及ばぬ。故に古來より鐵牛の機の如しと云うてをる。絶對不變にして而して不可思議の働きがある。――されど相對的知識から割り出した文字言句や妄想的煩惱の産物たる難題難問の總てを拂ひぬけ通り來つた眞箇の衲僧であれば、極めて容易に、至つて平意に、何の苦もなく喫茶喫飯裏にない得る、其の樣子を、紅爐上一點の雪の如し、と云ひ、平地上七穿八穴、と云うたものである。且く止る、それはそれとして、一切の文字、一切の言句、それらに擒はれず鐵牛の機に似たる心印狀態は如何なるものか。又如何に使用すべきか。――それは本則に參究するが一番近道である。

◎本則

舉、南泉、歸宗、麻谷、同去禮拜忠國師、至中路南泉於地上畫一圓相云、道得即去、歸宗於圓相中坐、麻谷便作女人拜、泉云、恁麼則不去也、歸宗云、是什麼心行、

讀方

舉す。南泉、歸宗、麻谷、同じく去つて、忠國師を禮拜せんとせり。中路に至つて、南泉地上に於て、一圓相を畫いて云く、「道ひ得ば即ち去らん。」歸宗、圓相の中に於て坐す。麻谷、便ち女人拜を作す。泉云く、「恁麼ならば則ち去らじ。」歸宗云く、「是れ什麼の心行ぞ。」

字解。

南泉、』南泉普願禪師のこと。――歸宗、』歸宗智常禪師のこと。――麻谷、』麻谷寶徹禪師のこと。

何れも馬祖道一禪師の法を傳へし方々。――忠國師、』大鑑慧能禪師の下に出られた南陽慧忠國師のこと。――同去、』同行、共に行く。――中路、』途中のこと。――一圓相、』字の如く○相を大地の上に畫いたのである。』或人は云く、「禪門に於て思想の發表を出來るだけ簡短な形容をとることにつとめた結果である。」と。或は其の意味もなきに非ず。されど、そればかりではない。其の時、其の場に應じ、把住放行、與奪殺

活、それが禪門の家風。世間も亦それでなければならぬ。――女人拜、』或人は云ふ、「女人拜とは五體を地に投じてするのでなく、たゞ合掌して腰を屈することである。」と。或は然らん。なぜなれば地上であるから。』實際の事は支那の婦人が寺に參詣して禮拜する處を見るべし、と井上君は示された。至極尤もであります。――要は有難しと恭敬する意である。――什麽心行、』心行は動機。通俗に云へば、どんなつもりだ。――何を考へてその樣なことを云ふ、くらひに見ておくべし。其の意は咎めるのである。』

分解省略。

提講。

茲に禪學者の參考になる好資料の話がある。ある日、馬祖下の三大老、南泉、歸宗、麻谷の三人が江西の馬祖山を出發し、長安をさして旅行の途に上られた。長安には肅宗の歸依を得て盛んに大法を擧揚しつゝある忠國師が御座る。法の上から云へば馬祖の叔父にあたる。故に敬意を表すると共に多少なりとも御垂示を仰ぎたし、と云ふ種々の動機から、法に於て親切なる三人が期せずして同行することになつた。古人は今人と撰を異にし、滿身是れ菩提心である故、修行三昧、造次の間、顚沛の時と雖も輕忽に光陰を徒費せぬ。

中、路に至るとあるから、旅程の中ほどで、南泉が同行兩人の脚下如何を點檢せんが爲めに一圓相○を畫いて云く、「何とでも此の事に適合する一句を云うたなら同行するが、さもなければ、拙僧は長安まで行くことは前の約束に違うても眞平御免を蒙る。」と。云はゞ子供の樣に駄々をこね出した。お互は此の際、如何になすべきや。天下の衲僧も此の一圓相に出會ひては一驚を喫せざるを得ず。――圜悟禪師は、「ア、厄介の野郎だ。風なきに波を起した。されど、風なきに波を起した心底を識得してもらひたい。」と。如何にも圜悟禪師の云はるゝ通り、南泉の心底を洞觀するが必要である。――流石、南泉の兄弟だけあ

つて間に髪を入れず、歸宗、圓相の中に端坐した。可謂、何の心行ぞと。――長の道中で草臥れた、と云ふのか。マサカ乾坤只一人と云ふ心底ではなからう。眞箇の處は歸宗知るのみ。』是れに似たる話がある。或僧が或僧に途中で出會うた。すると一人の僧が天蓋笠を投げうつて、圓中に坐するか圓外に坐すか、と問うた。一僧答へて、我は圓中に坐す、と云うて笠の上に坐斷した。』滑稽ではあるが、面白いところがある。』圜悟禪師は、圓中に於て坐すと云ふ處へ、知音同士は能く調子を合せる、と云うて居らるゝ。如何なる處を見て斯く云はれしや。研究すべき言葉である。麻谷は如何にするかと思ふと、端坐したる歸宗

に向つて女人拜をなした。――是れ又何の心行ぞ。――能禮所禮性空寂、自身他身體不二、であれば眞箇の禮拜である。然らざれば、終日終夜、佛名を唱へ禮拜しても僞禮虛拜である。麻谷の禮拜は眞禮か虛禮か。――諸君點檢して見てはどう。――人を點檢する以前に自己今日なしつゝある一切の事柄、それが一々眞であるか虛であるか、點檢することが先決問題である。――多くは僞であり虛でありはしまいか。――サスガ圜悟禪師は歸宗と麻谷の同道唱和底を見て著語して曰く、「一人鼓を打てば三箇も也た得たり。盡法界を一の劇場として兄弟三人の一放一收、一出一入、聊かも間隙なき樣子は、可謂、針芥相投じ函蓋相應ず、と。」之是は圜悟底。』諸君は如何に。――衲は、三人龜を證して鼈となす、と云ふ。――一人は圓相中に端坐し、一人は女人拜をなす。玆に於て南泉云く、「恁麼ならば則ち去らじ。」斯く云はれた南泉の心中は抑〻如何に、と研究し忖度する必要がある。大内君は左の如く研究し忖度してをらるゝ。

「二人ともに能く道ひ得て居るからモウ國師の處へ參究に往く必要もない、と云ふので往くことを止めたのであらうか。人情を以て推量して見ればそれに違ひないやうであるが、これは結局人情を以て摸索し得らるゝことではあるまい。要する所、南

泉の活機は去も不去も自由に轉身する所に在るのぢや。それ以上は各自實地の參究に任せるより外は無い。故に圜悟禪師は、半路に身を抽んずる是れ好人、と南泉を稱讃せられた。」と。

――去るの去らぬのと云ふ言句に轉換さるゝ樣では、南泉の胸中は夢にだも見る能はず。歸宗は南泉の心底を知つてか知らずにか、是什麽心行、今更何を云ふ、こゝまで來てもう長安行きは止めとは、一體どんな腹で左樣なことを云ふ、と咎めた。之は是れ歸宗の歸宗たる所以。是れなければ歸宗の存在を失する。のみならず南泉も張合ひがない。圜悟禪師が南泉に代つて賴に識破を得る。「あゝよかつた。拙僧の胸中を識破してくれた。」と。

――果して然るや否やは親しく南泉に問ふべし聞くべし。

◎頌

由基箭射猿、遶樹何太直、千箇與萬古、是誰曾中的、相呼相喚歸去來、曹溪路上休登陟、』復云、曹溪路坦平、爲什麽休登陟、』

讀方

由基が箭は猿を射たり。樹を遶ること何ぞ太だ直なりしぞ。千箇と萬古、是れ誰か曾て的に中てしや。相呼び相喚んで、歸んなん來。曹溪路上には登陟することを休めたり。復た云く、曹溪の路は坦平なるに、什麽としてか登陟を休めたるぞ。』

字解。

由基、』楚の大夫養由基のこと。

楚の恭王が山中で狩をしてをると、一疋の白猿が出て來た。群臣に命じて、いくら矢を放たせても、白猿はその矢を手でうけて恭王の一行を嘲弄するやうな風を見せてをる。日本の源義經が那須與一宗高を選出したも同一筆法で、(日本の方が或は是れを學んだのかもしれぬ。)弓の大家を選出して、これに白猿を射さしむることになつた。由基が弓を以て身構へをすると、白猿は樹を抱いて悲鳴した。由基がヒユツと箭を放つと、白猿は其の箭を避けようとして樹をグル〳〵遶つたが、由基の放つた

箭も白猿を追うてグル〳〵と樹をめぐり、遂にその猿を射殺した、と云ふことである。』

衲が雪竇禪師の意旨を忖度するに、白猿を法(絶對の眞理)に擬し、南泉、歸宗、麻谷を由基に擬したのであるやに思はるゝ。

――何太直、』其の意は、何と箭のはやいこと、猿を追ひかけて樹を遶るとは。――

千箇與萬古、』千箇は人、萬古は年。永き年代の間澤山の人が、と云ふ意味。――

曹溪路上、』是れは慧能禪師の南禪を句中に含めたのである。南禪には迷悟も去來も昇降もなく、本來無一物。故に休登陟、

と添へてある。此の句は雪竇禪師入念の作。――

復云、』記者の語。――

提講。

由基箭射猿、遶樹何太直、』古老の白猿が如何に全力を揮つて見た處で、由基の箭を避くることは出來ぬ。到頭、由基のために射殺された。』――

南泉、歸宗、麻谷、此の三人は禪門中の由基である。故に三人の箭先に向前するもの、何者もない。所謂、觸處得妙だ。見よ三人の箭先を。南泉は一圓相、歸宗は圓中端坐、麻谷は女人拜。美事に忠國師(白猿)(絕對眞理)を射殺した其の腕前は由基以上である。――聞かずや古往今來、此の事を修行する輩、其の數極めて多し。されど、箭を放つて眞箇的中したる人、至つて少し。

然るに南泉一行の人々は長安に未だ達せざる途中既に斯の如し。忠國師の家風と雖も此の外、別にあることなし、と徹見したか。南泉が歸宗、麻谷の兩人、そのものの力量の輕重を點檢したのか。敢へて長安まで同行するに及ばず、と云ふ意か。それは衲等の知る處に非ず。とにかく南泉の恁麽則不去也、と云ふ處を雪竇禪師が相呼相喚歸去來、と自己の見識より吟出された。其の意旨は南泉に共鳴し、元來法は當處を離れず常に湛然

たりである。信ぜざれば云うて聞かさう。曹溪路上休登陟、忠國師は曹溪六祖の嫡嗣である。故に國師の處へ行くことを曹溪路上と云うたものである。要するに本分の家鄉は人々本具である。それを忘却して他に向つて求むるは南禪の本旨に背く。然るに殊更に國師を訪問するは大丈夫のなすべきことに非ず。歸るべし歸るべし。徒に登陟する勿れ、とは聊か老婆に墮在す。

それに氣がつきしと見えて曹溪路坦平、爲什麼休登陟、と一喝を與へた。何故に三人が曹溪へ行くことをやめた。曹溪の路は平々坦々であるぞ。サァ行くべしサァ行け、拙僧が道案内をしてやらう、と。――雪竇禪師には平々坦々であつても、他の者には嶮又嶮、難又難である。南泉は始めに行くと云うて終りに去ると云ひ、雪竇は始めに休めよと云うて終りに行けと云ふ。點檢し來れば、南泉と云ひ雪竇と云ひ何れも同穴の狐である。油斷をすると意外の失敗をするぞ。されど南泉、雪竇、兩禪師兩鏡相照して中心影像なし。南泉に隨ふも好し、雪竇に贊するも惡しからず。故に衲は云ふ、去らんと欲せば去るべし、歸らんと思はゞ歸るべし。之是の場合は釋迦達磨の指揮も受くべからず。とは云ふものゝ、兩禪師以下の人は例あらば例に依るべし、條あらば條に隨ふべし。されど至道無難と云ふことを

忘れてはならぬ。要は歩々清風を起し、處々眞々々々を踏着すべし。果して然らば行くもよし歸るもよし、語るもよし默するもよし。よし〳〵。一切が由基の神箭、――之是を正念相續と云ふ。」

（昭和十四年十月七日講演）

397
257

昭和十四年十二月二十日印刷
昭和十四年十二月二十六日發行

著作兼發行者　佐々木四郎
東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社内

印刷者

發行所　東京市日本橋區室町二丁目一番地一
三井合名會社考査課

終